



吉田健一と英文学

著者	宇佐見 太市
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	14
ページ	47-65
発行年	2016-03
その他のタイトル	Kenichi Yoshida and English Literature
URL	http://hdl.handle.net/10112/10201

吉田健一と英文学

Kenichi Yoshida and English Literature

宇佐見 太 市
Taichi Usami

This paper attempts to examine closely and verify demonstratively an overall image of Kenichi Yoshida (1912-1977), a man of letters in Japan, especially in order to clarify and define his profile as a scholar of English literature. By going back and reviewing Yoshida's literary statements and also looking at the remarks of the persons concerned, we will be able to know Yoshida's doctrine of English literary studies in Japan, that is to say, his life-centered ideology, which has been lost in the branch of English literature in Japan today, and then to see forward-looking attitudes and methods in the studies of English literature in Japan. It will be worth noting that there are no treasures more precious than Yoshida's literary works. Kenichi Yoshida tells us that the present researchers in Japan who devote themselves to English literature should think of a more appropriate and prolific way to plow back into society.

キーワード

Kenichi Yoshida, studies of English literature in Japan, learning and society, the significance of English literary studies in present-day Japan, language and culture, English-language teaching

1. はじめに

バーチャルリアリティーの装置としての「文学研究」の社会的実践効果の実現・達成を視野に入れ、「英文学」と「英語教育学」との融合・統合・共創によって生起する新たなる「学知」の創出を勘案する筆者の十数年来の研究眼目は、「実践知性としての英文学研究」である¹⁾。それは、閉塞した時代の現代人に私たち英文学研究者はどう手を差し延べればよいのかとか、心の枯渇によって自滅の道を辿りがちな若者にとっての癒しと復活の道標は何なのかといった、現代日本が抱える逼迫した切実な緊急課題をひとりの英文学研究実践家の観点から常に念頭に置き、英文学と英語教育学とを包括・包摂することによって創生される、社会に活力をもたらす

人文学的知見の体得・修得を志向する研究視座だと言ってもいいだろう。

筆者のライフワークである上述の「実践知性としての英文学研究」は、日本の英文学研究界の将来を見据えながら歴代の英文学者たちによる英文学研究の実績をつぶさに精査・検証・分析し、その実証的な営為を通して、日本の英文学研究界の停滞・低迷の主因を剔抉していこうとするものである。筆者のここ十数年の一連の仕事はこれに尽きるだろう。現に、太平洋戦争中の英文学研究者たちの言説がもつ意味を慎重に考証し、彼らの戦中の言説と彼らの戦後の実際の行動との比較検討によって、外国文学としての日本の英文学研究の存在意義の考究に迫り、その過程で、日本の英文学研究界は何ゆえにここまで沈滞・低迷してしまったのかに言及した。そして同時に、これに対する活性化の処方箋はあるのか否かをも探求した。

こうした論題に真摯に対峙し、真相究明に向かわんとする筆者は今回、本稿において、第二次世界大戦後の日本の英文学界を牽引した吉田健一(1912-1977)に照準を合わせ、彼の、とりわけ英文学と英語教育に関連する言説から、あらまほしき人文学知の一端が摂取できればと願うばかりである。英文学研究を英語教育の応用篇として認識している筆者にとって、ケンブリッジ大学に学んだ英文学者でもあり、翻訳家でもあり、秀逸な文芸批評家でもあり、小説家でもあり、さらには随筆家でもある、豊かな感性と稀有な教養に裏打ちされた知の巨人・吉田健一像の考察は、停滞気味の現代日本の英文学研究界が抱える根源的諸問題を重層的かつ深層的に沈吟し剔抉すべきだと思われる昨今、将来に向けての一つの明るい兆し、一条の活路となるであろうと思われる。これによって、ともすれば今日、不要不急の学問領域と目されがちな日本の英文学研究が蘇生し、ヒューマニティズの中核として再び活況を呈し、知性と感性の総和として今後も永く存在しうることを願うのである。

ところで、吉田健一と英文学、そして英語教育に関する先行研究としては、岡崎壽一郎の「外国文学研究と受容の問題—19世紀英詩の受容—(磯田光一・吉田健一)」(『論集』第39号所収、駒沢大学外国語学部発行、1994年3月)、大八木敦彦の「吉田健一の英語教育論」(『文教大学女子短期大学部研究紀要』第48集所収、文教大学女子短期大学部発行、2005年1月)、小山太一の「孤独と強さ—吉田健一における英国的なもの」(『ユリイカ』2006年10月号所収、青土社)、小山太一の「言葉に一人で向き合うこと—吉田健一」(『英語青年』2006年11月号所収、研究社)、そして佐々木隆の「書誌から見た昭和時代(戦後)のワイルド受容—吉田健一を中心に—」(『日欧比較文化研究』第9号所収、日欧比較文化研究会発行、2008年4月)等が存在することをここで指摘したうえで、本稿は、上述の如く、筆者の年来続けてきた研究テーマ、実践知性としての英文学研究という視点から論述していくものであることを断っておきたい。

2. 文士・吉田健一

吉田健一の人生ならびに文業を的確に描き切った著書として第一に挙げたいのは、角地幸男

の『ケンブリッジ帰りの文士 吉田健一』（新潮社、2014）である。第一章の冒頭文、「なぜ十八歳の吉田健一は、半年足らずでケンブリッジ留学から帰ってきてしまったのだろうか」（角地幸男 15）は、読者にとって煽情的で、感興をそそるものである。この書物に寄せる著者・角地幸男の想いがこの一文に凝縮されていると言っても間違いなからう。角地幸男はこの謎解きに果敢に挑み、その解答を自著『ケンブリッジ帰りの文士 吉田健一』で開陳したのである。角地幸男のこの考証結果こそ、本稿の筆者にとって最大の関心事である。しかしそれに触れる前に、ひとまずここで吉田健一の人生の軌跡を俯瞰しておきたい。ただ、申すまでもなく吉田健一ほどの知の巨人ともなれば、その一生は人口に膾炙しているので今さら詳細な履歴を追うことも必要なからう。よって本稿では、高橋智子執筆の「吉田健一参考文献目録」（『日本女子大学紀要文学部』第51号所収、2002）、武藤康史執筆の「吉田健一の青春一年譜形式による伝記の試み」（『文學界』2007年9月号所収、文藝春秋）、島内裕子執筆の「吉田健一年譜・書誌」（前田晃一編『吉田健一 生誕100年最後の文士』所収、河出書房新社、2012）、藤本寿彦編の「年譜」（島内裕子編『英国の青年 吉田健一未収録エッセイ』所収、講談社、2014）、そして島内裕子編の「吉田健一年譜」（池澤夏樹編『吉田健一』所収、河出書房新社、2015）を参照しながら、吉田健一の生涯のあらましを素描したいと思う。

吉田健一は、父・吉田茂（1878-1967）、母・吉田雪子の長男として1912年3月27日、東京に生まれた。元号でいえば明治45年、つまり大正元年である。当時の父・吉田茂は、イタリアの日本大使館三等書記官であったが、第二次世界大戦後に長きにわたって内閣総理大臣（1946年5月から1947年5月まで第一次吉田内閣、1948年10月から1954年12月まで第二次～五次吉田内閣）を務めたことは周知の事実であろう。母・雪子は、外交官・政治家の牧野伸顕（大久保利通の二男、1861-1949）の長女である。吉田健一は、両親が海外在住のため、幼年期は母方の牧野伸顕邸で養育される。その後、外交官である父・吉田茂の仕事柄、吉田健一は、幼少時から諸外国での居住体験を持つことになる。彼は、今で言う、帰国子女である。1918年2月、父・吉田茂は中国山東省済南領事に任命される。6歳の吉田健一は同年4月に学習院初等科に入学するが、ほどなく中退して、家族とともに青島や済南に住む。翌1919年、第一次世界大戦後のパリ講和会議次席全権大使・牧野伸顕の随員として牧野伸顕の娘婿、つまり吉田健一の父・吉田茂が渡仏することになり、7歳の吉田健一も遅れて家族とともにパリで合流する。翌年の1920年5月、父・吉田茂が日本大使館一等書記官として英国在勤を命じられたのを機に、6月、吉田健一もパリからロンドンに転居し、英国の小学校に入学する。1922年10歳のとき、父・吉田茂が中国天津総領事に任ぜられたので、吉田健一は天津の英国人小学校に通う。その後、吉田健一は1925年に帰国し、翌年14歳の1926年4月には暁星中学校二年生（旧制）に編入し、1930年3月、暁星中学校を卒業する。暁星中学校在学中に彼はフランス語の基礎を習得する。そして同年10月、18歳の吉田健一はケンブリッジ大学キングズ・コレッジに入学し、古典学者のG. L. ディキンソン（Goldworthy Lowes Dickinson、1862-1932）や英文学者の

F. L. ルカス (Frank Laurence Lucas, 1894-1967) に学び、ヨーロッパ文学に開眼する。しかるに翌年の1931年3月には、ケンブリッジ大学を中退して帰国する。

帰国後の吉田健一は、主として文芸評論家・河上徹太郎 (1902-1980) に師事し、1931年、河上徹太郎の進言により、アテネ・フランセに入学し、1935年6月、アテネ・フランセを卒業する。同年11月、23歳の吉田健一にとって初めての翻訳本となるエドガー・アラン・ポーの『覚書 (マルジナリア)』 (芝書店) が刊行される。爾来、英国体験の回想、海外文学の紹介文、評論、書評、エッセイ、そして翻訳などを矢継ぎ早に世に問い、文士稼業に専念する。1937年夏頃、雑誌『文學界』 (文藝春秋) にまつわる仕事を通じて、文芸評論家でもあり作家でもある中村光夫 (1911-1988) と出会い、その後、中村光夫は吉田健一にとっての終生の友となる。こうして吉田健一は、文学者との交友を広めていく。太平洋戦争真っ只中の1943年、31歳の吉田健一は、国際文化振興会翻訳室に勤務する。第二次世界大戦後の昭和二十年代に入ると、文化雑誌『雄鶏通信』 (雄鶏社) に、英文学に関する文章を盛んに発表するようになる。実際、第二次世界大戦後の昭和二十年代以降の吉田健一の文学活動は、まさしく英文学者としてのものと断言しても良からう。『英國の文學』 (雄鶏社、1949) や『シェイクスピア』 (池田書店、1952) 等の本格的な大部の英文学研究書や、サミュエル・ジョンソンの『シェイクスピア論』 (思索社、1948)、ルイス・キャロルの『ふしぎな国のアリス』 (小山書店、1950)、D. H. ロレンスの『息子と恋人』 (小山書店、1950)、ダニエル・デフォーの『ロビンソン漂流記』 (新潮文庫、1951)、そしてG. K. チェスタトンの『木曜日の男』 (早川書房、1951) 等の翻訳書の刊行が増え、この時期はまさに日本における気鋭の英文学研究者としての本領を発揮した。ときあたかも父・吉田茂は、内閣総理大臣を務めていた。次に昭和三十年代の吉田健一はと言えば、西欧を通して見た文芸評論やエッセイの類いが中心となる。そして晩年は、長編小説、短編小説、評論、エッセイなど、文士としての仕事の領域は多岐にわたるが、同時に、英文学者としての側面も一貫して保持し、たとえば56歳のときにはシャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』 (『世界文学全集22』、集英社、1968) の翻訳を、62歳のときは、『英國に就て』 (筑摩書房、1974) を、そして翌63歳のときには『英語英文学に就て』 (筑摩書房、1975) を刊行している。また、51歳から57歳までのあいだに (1963年4月～1969年3月)、大学教授 (中央大学文学部教授) としての履歴もあり、英文学を講じた。1977年8月3日、吉田健一は、肺炎のため65歳で亡くなる。上述の藤本寿彦編の「年譜」に拠れば、作家・石川淳 (1899-1987) は、「英語のできる人は多いが彼のは英国文明を理解し、英国人そのものになり切ったような英語であった。なんとも残念だ」と言って、その死を惜しんだとのことである。吉田健一の生涯をこのように辿る限り、彼の文人としての行動軌跡のおおもとにあるのは、英文学者としての資性と書いても過言ではないだろう。

ここで、吉田健一の実娘・吉田暁子の著書『父吉田健一』 (河出書房新社、2013) に言及しておきたい。父に向ける娘の鋭い眼差しは、何にも増して侮りがたいものだからである。吉田

暁子のこの著書は、「まっすぐな線—父のこと」というタイトルの文章から始まる。まさに巻頭言の、その一部を以下に引用する。

父の一生は、ものを書きたくてもものを書き始め、結婚して家庭を持ち、ものを書いて生計を立て、犬を飼い、面白い本、良い文章を読み、美味と酒に親しみ、良い友人とつき合い、旅を愛したというもので、いわば単純である。ものを書いて、しかもそれで家族を養うということには特殊な難しさがあると思うが、そのためにも父の一生は単純になったと思う。そして父はそういう単純な内容の生活に至極単純な形をつけた。……………

父の生活は単純だった。多くのことを切り捨てたのだろう。（吉田暁子 10-13）

この引用箇所から私たちは、生涯を通じて文筆業に専従した稀有の文人、吉田健一の在りし日の面影を偲ぶことができるだろう。文章を書くことを第一義的なものと考えていた吉田健一の、一本筋の通った生真面目な生前の姿を私たちに彷彿させる。実娘の吉田暁子は、同書でさらに、「父のライフ・スタイルという、仕事場が住居でもあった父が毎日の時間割を厳密に守っていたことを、父の徹底主義の第一例とするべきだろう」（吉田暁子 61）と述べ、これは、同書冒頭の「父の一生、生活は、まっすぐに引いた線とっていい」（吉田暁子 7）という表現を敷衍している。このように吉田暁子は、父・吉田健一を語るに際して、「単純」という言葉を何度も使っているが、吉田健一の、そのような「単純」な処世の道から数多の豊饒な文学的成果が生み出されたことに私たちは驚嘆の念を禁じ得ない。

実娘・吉田暁子が語る父親像に関しては、月刊雑誌『文藝春秋』（文藝春秋、2006年2月号）にも、簡にして要を得た文章「父と語り合った夜の言葉」が記載されている。上述の吉田暁子の単著の記述内容とほぼ同じだが、改めて吉田健一の生前の姿が浮かび上がってくる。以下にそれを引用したい。

……吉田健一というと、父言うところの「食味評論家」だと思っている人は、是非何か一つ、父の「純文学的」著作を手にとってみて欲しい。飲み食い随筆を読んでも、父の強靱な精神は文章の裏に感じられるはずだ。その精神は若い時、生きて行くについて何かすることがあるはずだと真剣に考え、考えたあげくに言葉の世界を選んだ。書くことにどうやら自信を得ると結婚し、それからは妻子共々、ただ生きるだけでなく、人生の与えてくれる良いものを楽しむことも大切にするようになった。……………

書くという仕事は非常な集中力を精神に要求する。自分が言葉の世界であることをしてい

れば「良い生活」が可能だと知った父は、一週間のうち六日は「酒は一切飲まない」など、厳格な生活規律を確立し、まことに勤勉な人生を送った。(吉田暁子 282)

若き日の吉田健一は、激動する世界情勢のなかで政治家として天寿を全うした実父・吉田茂とは異なり、「言葉の世界」で生きて行くことを決意し、実際その初志を貫き通したことを、吉田健一の娘・吉田暁子は読者に伝えてくれる。そしてその吉田健一は、「ただ生きるだけでなく、人生の与えてくれる良いものを楽しむこと」にも重きを置いたとのことである。学問や芸術全般を己の実人生と密に絡めて追究していこうとするその好事家的生き方は、若き日の英国留学の薫陶のたまものであったと思われる。吉田健一の人生に対する態度には英国精神の真髓が感取できるからである。現に晩年の1974年に吉田健一は、『英國に就て』と題する著書を刊行しているが、そのなかの「英国の文化の流れ」の章で、文学と実人生との関係について持論を展開している。そして彼はその持論を実際に己の人生において実践したのである。その際、彼の人生観の根幹には、吉田暁子が言うところの「強靱な精神」があったのだ。「勤勉な人生」を基調とした吉田健一の理想的ともいえるホリスティックな文筆活動の豊かな実りを通して、後代の私たち現代人、特に筆者のような日本で英米文学を専攻する者は今、先達・吉田健一が遺した卓抜な人文学的知性を感受し、体得しうるのである。人文学領域、とりわけ英米文学研究界にとって停滞・沈滞という過酷な状況下にある現代の私たちは、吉田健一が後世に伝えた偉大な足跡の再評価を通して、生き直すことができるのだ。よって吉田健一は、われらが救世主たりうる存在だと、筆者は確信している。なぜなら第二次世界大戦後、少なくとも大学を中心とした日本のアカデミズムの世界では人文科学分野も自然科学分野と同様だと考えられる風潮が強まり、学問研究なるものはおしなべて客観的・実証的態度に徹するべきで個人の感情等を吐露してはいけないのだという、まことしやかな教義が主流を占め、現に大学に籍を置く英米文学研究者のほとんどは己の個人的感情等は封印し、権威ある学会というアカデミズムの世界にひたすら閉じ籠るようになってしまったからだ。英米文学研究者は、己が属する学会や大学を中心としたアカデミズムの尺度・基準によって下される業績評価に一喜一憂する傾向が強まった。しかしこれはひとつ間違えば、現実社会からの逃避になりかねないと思う。言わば、大学や学会という閉じた組織・機関への引き籠り現象である。こうした風潮に敢然と逆らい、警鐘を鳴らしたのが『太平洋戦争と英文学者』(研究社、1999)の著者・宮崎芳三である。宮崎芳三は、「学問研究」という名的美辞麗句に守られているがために実質的には脆弱なものとなってしまった日本の英文学研究界の実態を、しんから憂え、活性化のための処方箋を模索したのだ²⁾。英文学研究者の現実逃避を忌み嫌った宮崎芳三は、その著書『太平洋戦争と英文学者』で、特段吉田健一に触れてはいないが、宮崎芳三と吉田健一の両者には学問観ならびに文学観において一脈相通ずるところがあった、と筆者には思われる。二人は共に、既存の日本の英文学研究法の抜本的転換をしんから目指したのではないだろうか。現に吉田健一は、本稿で既に

触れた『英國の文學』の「後記」に、英文学研究に対峙する当時の己の心境を正直に吐露している。その箇所を引用するに際して、本稿においては、吉田健一著『英國の文學 シェイクスピア 吉田健一著作集第一巻』（石川淳／河上徹太郎／中村光夫監修、篠田一士／清水徹／丸谷才一編集、集英社、1978）所収の「解題」（清水徹執筆）を用いる。第二次世界大戦後の1949年の日本にあって、吉田健一が英文学研究の意義を熱く説いている姿勢に私たちは注視したいと思う。特に吉田健一が言う「英國の文學の本格的な紹介」という表現に、吉田健一の真骨頂がうかがわれる。明治以降、夏目漱石（1867-1916）や坪内逍遙（1859-1935）らに代表される歴代の英文学者たちによる研究遺産を前にして、吉田健一はなおかつ「本格的な紹介」を希求したのである。日本における英文学研究の「意義」を論じた吉田健一の貴重な言説である。

……初めに執筆を受託した時は、単なる紹介の積りで気軽に引き受けたのであるが、実際に仕事に取り掛かって見て、次第に熱意を覚え、結局、今年最も身を入れた仕事となった。その理由は、一つには我々日本人が今日まで最も親しんで来たロシア、フランスの文學に對して、英國の文學の重要さを指摘することの意義を感じたからであり、一つには、我が國での長年に亙る研究や宣傳にも拘らず、英國の文學の本格的な紹介といふことが、それを試みるものに全くの處女地を提供してゐることに氣附いたからである。私が従来、英國の文學に就て持つてゐた觀念も、この仕事をしてゐるうちに多くの點で修正された。（吉田健一 452-453）

ところで繰り返しになるが、吉田健一の娘・吉田暁子が私たちに教えてくれる上述の吉田健一像から窺い知れることは、吉田健一の文學觀の根底には、まさしく現実なるもの、すなわち実人生が鎮座しているということである。吉田健一は、文學的營為と実人生は切り離せるものではないという信条・信念に基づいて、たとえ何度か渡航することがあったにせよ、日本に軸足を置いての仕事を完遂した。これは、上記の宮崎芳三が唱える學問觀と同一である。現に宮崎芳三は、「學問研究は、その人の生き方にかかわる、というのが私の考えの中心にある。なぜなら私は自分を失わずに生き通したいから。自分が失われなければ、当然ながらその人としての一定の見方も出てくるのである。その一定の見方をもたない心は、思想以前のものだ」（宮崎芳三 145）と、言う。帰国子女のはしりであり、コスモポリタンな感覺を充分に身につけていた吉田健一にあって、彼は確たる信念に基づいて、祖国・日本に軸足を置き、日本語での文筆活動に勤しんだのである。吉田健一は、しんから意志強固な、「強韌な精神」を持った文人であったと、改めて言えるだろう。ここで筆者は、吉田健一の文學的・學問的信条は現代詩人・荒川洋治（1949-）のそれに類似していることを付言しておきたい。荒川洋治の著書『文學の空気のあるところ』（中央公論新社、2015）から彼の言説の一部を引用してみれば、そのことは一目瞭然である。

……祖父牧野伸顕のもとで育てられ、幼少の頃から身近にこの明治の気概を持つ祖父を見ながら成長した十八歳の日本人留学生吉田健一は、異国にあって美しいケンブリッジの空気に安穩にひたっていることに居たたまれない何か別な衝動に駆られていたのではないか。

成人後に英国に留学した夏目漱石が文明開化を外から眺めて苦々しく思ったのとは裏腹に、吉田健一が常に文明開化を内から眺めて苦々しい思いを嘯み締めなければならない位置にいたということである。

外国人としての自己—小学校以来、英語という「第一の母国語」で何不自由なくやってきた吉田健一は、ケンブリッジに来て初めてアウトサイダーの位置に立たされた。

圧倒的な過去が実在するケンブリッジの近代に感染することによって、生まれて初めて英語が自分の「第一の母国語」でないことを痛切に意識したに違いない。その母国語を生んだ過去の深みにはまればはまるほど、否応なくその彼らの「文化」から自分がアウトサイダーの位置にいることに気づくこと—なんの因果か「中途半端の付焼刃」でないがゆえに、まさにそれゆえにこそ吉田健一は自分の拠って立つ根幹が揺らぐほどの窮地に立たされたと言っている。

これは断じてナショナリズムの問題ではなく、吉田健一個人のアイデンティティに関わる危機である。目の前に立ちふさがる彼らの「文化」に敏感であればあるほど、吉田健一は自分が本来属しているはずの文化（具体的には、ディキンソンが言った「自分の国の土」である日本語）に否応なく敏感にならざるを得なかったに違いない。この時点で、若き吉田健一に失った故国があるとすれば、それは「第一の母国語」としての「英語」以外に考えられない。吉田健一は、まさにケンブリッジで故国（第一の母国語＝英語）を喪失したのだった。（角地幸男 24-32）

そして角地幸男は続けて、「その「第一の母国語」を捨てて自らの意志で選び取った（あるいは選び取らざるを得なかった）日本語で書く行為とは、いったい何を意味していたのか」（角地幸男 34）、と言う。

ケンブリッジ大学に晴れて入学したものの、半年も経たないうちに、日本に帰って文士になりたいと決意した吉田健一は、このまま英国で英国の文学の勉強を続けることに懐疑的になり、このことでケンブリッジ大学キングズ・コレッジの fellow だったディキンソンのもとに相談に出かけた。このときの模様は、吉田健一著『交遊録 東京の昔 吉田健一著作集第二十二巻』（石川淳／河上徹太郎／中村光夫監修、篠田一士／清水徹／丸谷オ一編集、集英社、1980）所収の『交遊録』に詳しく述べられている。吉田健一は、「ディキンソンは殆ど二つ返事の早さ

でこつちが言つたことを承知した。それまでの付き合いで大體の事情は察してゐたものと思はれる。その時ディッキンソンが言つたことで覺えてゐるのは或る種の仕事をするには自分の國の土が必要だといふことである」(吉田健一 37)、と記述している。

ディッキンソンが言う「自分の國の土」とは、自分の國の言語であり、さらには自分の國の文化であろう。特に文化に関しては、角地幸男が述べているように、吉田健一は重厚な英国文化に対して「常に傍觀者の位置に身を置くことを強いられた」(角地幸男 31)のである。ケンブリッジ大学を退学して日本に帰国するという吉田健一の決心は、「一刻も早く日本に帰って故國(=日本語)を発見しなければという切羽詰った焦燥感だったのではないか」(角地幸男 32)と、角地幸男は吉田健一の胸中を推量する。本稿第二節「文人・吉田健一」で述べたように、こうして彼は帰国後、「第一の母國語」だった英語を捨てて、自らの意志で選び取った日本語で文筆活動を開始する。作家でありフランス文学者でもある松浦寿輝は、論考「吉田健一の贅沢」(『UP』402号、東京大学出版会、2006年4月)のなかで、「誰にとっても「自分の國の土」が必要な仕事があり人生の一時期があることだけは間違いない。……………このとき吉田が下した帰國の決断はきわめて重いもので、むろん戦争が挟まったとはいえ彼はそれきり二十二年間、四十一歳になるまで再び英國の土を踏まなかつた」(松浦寿輝 58-59)、と言う。また、このことに関して想起させられるのは、吉田健一とは生きた時代は違ふが、現代作家・水村美苗(1951-)の存在である。彼女の、英語と日本語との深い関わりは、あだやおろそかにはできない。12歳の時、父の仕事の関係で一家そろって渡米した水村美苗は、異國の地アメリカで、姉の奈苗とは対照的に、アメリカにはなじみず、牽引力の強い英語ではなく母語の日本語に執着し続け、日本語の世界に耽溺した。水村美苗は、「読む」という営為こそ文学の本質であるという信念から、明治から昭和にかけての日本近代文学を己が精神の砦としたいと決意し、彼女にとって精神世界の探求を担う書き言葉としての言語たる「文学言語」、すなわち日本語を選択したことは周知の事実であろう³⁾。水村美苗はイェール大学ならびにイェール大学大学院(共に仏文学専攻)修了後、プリンストン大学、ミシガン大学、そしてスタンフォード大学等で教鞭を執るが(日本近代文学担当)、1990年『續明暗』(筑摩書房)で作家デビューを果たし、以後、『私小説 from left to right』(新潮社、1995)や、『本格小説』(新潮社、2002)を刊行し、さらに2008年には『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』(筑摩書房)を出版して、日本語と英語をめぐる根源的な認識を世に問い、一大センセーションを巻き起こした。その後2015年にその増補版として文庫形式で『増補 日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』(筑摩書房)を上梓する。イェール大学ならびにイェール大学大学院で言語に関して掘り下げて論究する峻厳な学究態度を修得し、かつ、夏目漱石の『こころ』の翻訳(1957)で著名なエドウィン・マッククレラン(Edwin McClellan, 1925-2009)との遭遇も幸いし、水村美苗は、グローバリゼーションのこの時代にあつて、叡智を求める人にとっては牽引力を持つてであろうはずの英語ではなく、己の精神の砦となりうる日本語を敢えて選択したのである。水村美苗の侮るべからざる力

量、すなわち、外国語教育と深く関連する母語・早期英語教育・ネイティブスピーカー等の問題に寄せる気概と厳粛な認識、そしてその志操には敬服せざるをえない。

月刊雑誌『新潮』〈2009年1月号〉の「特別対談：日本語の危機とウェブ進化」において水村美苗は、インターネットの専門家である梅田望夫と対談し、その場で日本語の将来に対する強い危機感を吐露している。「西洋語のロゴスに地球が支配されないために、非西洋語の国語としての日本語を維持していく。それこそが人類的ミッションではないか」（水村美苗／梅田望夫 347）と揚言する水村美苗は、対談者の梅田望夫相手に深い焦慮に駆られつつ、「グローバリゼーションというけれど、その一方にはグローバリゼーションに回収できないローカルというか、個別的なものがある。それは人間が地球のさまざまな土地に住み、さまざまな母語を話している限り、必然的に存在するものですよ。だから、ローカルであることを意識しつつ、そのローカルな環境で生きる運命をどう引き受けるかということ、日本語で書くことでもって人類に向けて示していかなければならない。すべての人が人類に向けて直接書くのを目指す必要はない。あえて言えば、人類という抽象的な対象に向けて書かれたことと、ローカルな人間に向けて書かれたことがちがうのを日本人が日本語で読み書きして示すことが、人類への貢献にもなると思うんです。すべての人が英語という人類語で書いてしまったら、世界はとて退屈なものになってしまう。……………グローバルなものに回収しきれない世界の存在を訴え続けることこそ、パブリックな行為だと思うんですよ」（水村美苗／梅田望夫 355）と、持論をぶつ。英語の支配という問題に敢為の精神で立ち向かう水村美苗の肩肘張らない率直な意見を傾聴するに如くはないだろう。新たな主体性の確立を希求して日本語の世界に帰って行った吉田健一と水村美苗の決断の勇氣は、筆者の心に漣が立つ。

このように水村美苗同様、英語ではなく日本語を選んだ、すぐれて知の人であった吉田健一の最初の本格的な英文学研究書『英國の文學』は、作家・大岡昇平〈1909-1988〉の絶賛するところとなる。大岡昇平は論考「『英國の文學』と『酒宴』」（前田晃一編『吉田健一 生誕100年最後の文士』所収、河出書房新社、2012）のなかで、「『英國の文學』の大半はシェイクスピアとエリザベス朝形而上詩人について費やされているのである。私は彼の引用の適切であること、見識の高さに圧倒され、以来、「健坊」に対する尊敬を失ったことはない」（大岡昇平 117）と記述している。また、吉田健一が晩年に刊行した『英國に就て』に関しては、文庫版『英國に就て』（筑摩書房、2015）所収の小野寺健の「解説」が秀逸である。小野寺健は、吉田健一の英国文化論をみごとに咀嚼しており、その「解説」のタイトルが「きわめつきの英国論」ということからわかる通り、『英國に就て』は通常の英文学者には書けない定見だと小野寺健は断じている。以下に小野寺健の文章を引用する。

吉田健一の英国文化理解は日本人のなかでは群を抜いている。こういう異例な環境で教養を積んだ人だけに、吉田氏の英国論は—その論じかた自体が英国の文化そのものと言って

もいいのだが一けっして空疎な観念論に走らず、具体的な人間をめぐる逸話や、実生活の経験、建築や家具、馬や犬といった生活のなかの物に即して語るといふふうで、その話を聞いているとやがて人生が豊かで幸せに思えてくるといった、きわめて上等なものである。これは、言うまでもなく吉田氏の品性が上等だということに他ならなくて、そういう人はいるようでなかなかいないと言ったら、余計な悪口になるだろうか。……………

だが、重要なのは、この文化観の根底である。吉田氏は今の主張につづけて、英国人が文化ということなどあまり考えないのは、そういうものがいくらあってもいずれは死ななければならない我々にとって何になるかと考えるからだと言ひ、しかし、それは人生を^{はかな}儚いと見る見方にはつながらず、むしろ生きているあいだは現世での生活を^{はかな}楽しもうという発想になると言っている。そして、こういう覚悟と裏腹に、死ぬまでは堪えていようという、本格的な厭世観あるいは現実主義があると言うのだ。……………要するに、英国では「文化は生活の別名にすぎない」というのである。(小野寺健 292-294)

ところでこの「文化」に関してであるが、晩年ではなく、むしろ逆の青年期の1938年2月、26歳の吉田健一は、河上徹太郎の推挙で、雑誌『自由』に「英国の青年」という題名の本格的な比較文明論を載せたことをここで触れておきたい。これは自らの英国体験を自家葉籠中の物とした評論で、文人・吉田健一のその後の思索の原点、特に第二次世界大戦後の英文学者としての仕事の出発点とも言えるものである。日本という国において、いかに異国の、特に欧米の文学・芸術等を融解しうるかという、今後の己にとっての切実な命題を扱った若き日の吉田健一の論考「英国の青年」(島内裕子編『英国の青年 吉田健一未収録エッセイ』所収、講談社、2014)を、以下に引用したいと思う。これは編者によって、新漢字新かな遣いによる表記に改められていることを付言しておく。

日本の文化は、その進歩の根底にあって着実に外来の事象を血肉化しつつある、調和の精神に求むべきである。この調和作用により、我々の目に触れない箇所^{箇所}に於て、新日本の文化伝統は徐々に作られつつある。これはジャアナリズムによって論じ得るものではなく、歴史家によって論ぜられる範疇のものである。而もこの伝統を作^つて居るのは、我々日本の青年の生活であって、他の何物でもない。消極的に言^つてそうであるし、積極的に言^つて、それは我々の精神活動である。諸制度は完備し、我が文化の過去の傑作は国内に氾濫して居て、我々には為す所がないとは義理にも言えな^らう。真のデカダンスが到来するのは、新興日本が人類発達史に於るその使命を果してからのことである。故に私は、一個人の精神的成長に於る一段階としてのデカダンスなら認めるが我国一般の青年がデカダンスに陥^つて居ることなどは認めたくも認められないのである。(吉田健一 29-30)

青年・吉田健一のこの評論におけるテーマは、西欧の文学の「血肉化」に関するものであり、これは前述の晩年の作『英國に就て』にまで続く吉田健一の一貫した問題意識である。彼は、生涯を通じて常にこの問題意識を念頭に置き、執筆作業に勤しんだのである。英国の文学・文化・言語と日本のそれらとの渾然一体となったものを吉田健一は敢為の精神で追究したと言えよう。高遠な思想のもと、西洋の文化を撰取し、わが血とし、肉とした吉田健一の志操は、今日の日本の停滞気味の英文学研究界にとっての再生・蘇生の範とすべきである。

4. 展望／まとめ

吉田健一の父・吉田茂は第二次世界大戦後、通算7年余り内閣総理大臣を務め、その間、サンフランシスコ講和条約、日米安全保障条約を結び、大戦後の日本の骨格を造った政治家である。このように第二次世界大戦後に政治家として活躍した吉田茂は、しかるに、1939年駐英大使を最後に外交官生活を終え、第二次世界大戦後に東久邇宮内閣の外務大臣に就任するまでの六年間は無位無官の、公務を終えた身分であり、晴耕雨読の生活を送っていたが、実は密かに、1941年12月に始まる米英両国との戦争に反対し、徒労に帰したとはいえ、直前まで開戦回避工作に奔走した。彼はアングロサクソンと対立する愚かしさを熟知していたのである。現に1941年10月16日、第三次近衛文麿内閣が総辞職し、東条英機内閣の誕生により軍部の専横が激しくなるのを憂慮した吉田茂は、事態の緩和に水面下で動いた。さらに終戦間近には和平工作にも尽力した。そのために終戦間際の1945年4月、吉田茂は九段の憲兵隊に監禁・逮捕され、その後代々木の陸軍監獄に留置され、さらに目黒の刑務所に移送された経緯がある。

政治家としての吉田茂の基本姿勢は一貫して、現実主義であった。その一例がサンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約の締結である。それゆえに彼は、戦後の世論の批判を受けることが長く続いた⁴⁾。外交官であり政治家、つまり実務家であったこのような父・吉田茂を、「言葉の世界」で生きる文人・吉田健一は一体どのように見ていたのだろうか。これを知るには、吉田健一著『交遊録 東京の昔 吉田健一著作集第二十二巻』（石川淳／河上徹太郎／中村光夫監修、篠田一士／清水徹／丸谷オ一編集、集英社、1980）所収の『交遊録』を紐解けばよいだろう。

吉田健一は同書で、父・吉田茂を「文明の人間だつた」（吉田健一 198）と言い切っている。死後の父・吉田茂を偲んで、「これは必ずしも愚痴でなくて残念に思ふのはもつと父をこつちの他の友達に引き合せて置けなかつたことである。……………父が政治家だつたのはそれが日本、或は明治以後の日本でだつた限りでは不幸なことだつた」（吉田健一 196-197）、と吉田健一は述懐する。父・吉田茂がしんに望んだのは、生き馬の目を抜くようなしたたかで厳しい行政の世界で生きる人たちばかりではなく、学術・文芸を主とした「言葉の世界」に属する知識人・文化人たちとの交遊ではなかつたのかと、また、父のために生前、そうした「知」に溢れた人

たちとの交遊の場をもっと設定すべきだったと、吉田健一は言うのだ。そしてこのエッセイで知る限り、父・吉田茂は、生涯「不遇の境地にあつた」(吉田健一 184)と息子の吉田健一は述べ、「父の場合に所謂、立身出世をすることが仕事をするのと同義語であり、それが自分で選んだ職業が役人だつたのであるから避けられないことだつたといふことである」(吉田健一 187)と続ける。吉田健一の娘・吉田暁子が父・吉田健一を冷静沈着な態度で眺めたように、吉田健一の父・吉田茂に対する眼差しは、底に実父に対する敬愛の念をたたえた清冽なものである。父・吉田茂の現実主義的政治手法を直視した上で、父・吉田茂にさらなる魂の啓培の場、すなわち「言葉の世界」を提供したかったという息子の切ない想いではないだろうか。父・息子両者の生き方の根底には実人生と緊密に絡んだリアリズムという精神が厳存していることに間違いはないが、ただ、父・吉田茂にとってのリアリズムというのは、まさに非情な外交を主とした生臭い現実政治を舞台にしたものを指す。そんな父に、軽妙洒脱で、考えることの尊厳を重んじる文化人・知識人たちとの交遊を通じて感知できる、人間の魂の奥底にあるもうひとつのリアリズムにさらにもっと接して欲しかった、と吉田健一は述べるのだ。なぜなら本来、父・吉田茂にはそれを受容するに足る資質があった、と吉田健一は思ったからである。また、長谷川郁夫は、著書『吉田健一』(新潮社、2014)のなかで、父・吉田茂の外務大臣就任に伴って吉田健一は、「英語力」と「秀でた知力」とを買われ、しばらくのあいだ父・吉田茂の「秘書役」と見られる立場にいたらしいが、それも短期間に終わった、と記す。そしてその後続けて長谷川郁夫は、「父もまた、長男が政治に不向きなことを早々に悟ったのだろう。息子の勤勉な性質を知る父は同時に、ノンチャランな対応を認める余裕をもっていたものと思われる。この父と子の情愛通うほのぼのとした関係は、何種かのユーモラスな対談のなかにも濃密にあらわれている」(長谷川郁夫 229)と、言う。父・吉田茂は、息子・吉田健一の「勤勉な性質」を見抜いていたのである。ちょうど吉田健一の娘・吉田暁子が父・吉田健一の「勤勉な人生」を見通していたのと同じように。吉田健一は、しんそこ「勤勉な」学徒であったのだ。

さて、実父・吉田茂からも実娘・吉田暁子からも「勤勉な」文学者だと認められた吉田健一の英語教育に関する所見はと言えば、それは吉田健一著『近代詩に就て 英語と英国と英人吉田健一著作集第九巻』(石川淳／河上徹太郎／中村光夫監修、篠田一士／清水徹／丸谷才一編集、集英社、1979)』に網羅されている。そしてその極め付きは、「読むことと話すこと」と題された章である。読むことと話すことがいかに連動しているかを、そしてまた、文学の意義は何かを綴ったエッセイである。この著書の初版は1960年の垂水書房版であるが、以下の引用には、吉田健一著『英語と英国と英人』(講談社、1992)を用いる。

一国の言語の主体をなすものはその国の文学であって、その言語を知ろうと思えばその文学を読む他ない。そこで言葉は始めて生きた形を与えられて、この生きた形を知ることが読むことなのである。つまり、読むことが同時に話すことを覚えることになる形で読ま

なければならぬのであって、これは何も特別に高級なことを言っているのではない。（吉田健一 52）

吉田健一とは生きた時代が全く違うが、実はロシア語会議通訳者ならびに作家として多方面で活躍した米原万里（1950-2006）も文学の意義を、「文学こそがその民族の精神の軌跡、精神の歩みを記したもので、その精神のエキスである」⁵⁾と、説いている。英語教育学の応用篇として英文学作品を活用する立場の筆者は、英文解釈という営為は、運用の仕方次第では一層豊かな言語活動を推進することもでき、高度な言語読解力を養成することもできるのだという考え方に立脚している⁶⁾。このような英文解釈、すなわち「訳」の効用とか「文学と教育」の融合・統合とかを説く示唆に富む書物として、イギリスを代表する応用言語学者のガイ・クック（Guy Cook）の*Translation in Language Teaching: An Argument for Reassessment*（Oxford Univ. Press, 2010）や、イギリスの著名な文体論研究家であり、同時に応用言語学者でもある H. G. ウイドゥソン（H.G. Widdowson）の*Practical Stylistics: An Approach to Poetry*（Oxford Univ. Press, 1992）などは、私たち英文学研究者には既に馴染み深いものである。さらに今、日本においても斎藤兆史⁷⁾、菅原克也⁸⁾、山本史郎⁹⁾といった英文学者たちがこの分野を牽引している。また、イギリスの英文学者 F. R. リーヴィス（F. R. Leavis）は、著書*Education and the University: A Sketch for an 'English School'*（Books for Libraries Press, 1943）において、英文科の果たす役割は単に英文学の専門知識を教えることだけではなく、むしろ知性の訓練だと言い、文学作品読解力育成は理解力や判断力や分析能力の鍛錬を意味するのだ（By training of reading capacity I mean the training of perception, judgment and analytic skill commonly referred to as 'practical criticism' — or, rather, the training that 'practical criticism' ought to be.）¹⁰⁾と論述する。米原万里、ガイ・クック、H. G. ウイドゥソン、斎藤兆史、菅原克也、山本史郎、F. R. リーヴィス、そして筆者の英文学教育観は、吉田健一のそれと同種のものであろう。

明治以来、日本の人文学分野のフロントランナーとして走り続けてきた英文学研究の世界は、今、制度疲労により恐るべき危機に瀕していると言わざるをえないだろう。これに関して言語学者・大津由紀雄は、編著書『危機に立つ日本の英語教育』（慶應義塾大学出版会、2009）のなかで、かつては英語学や英米文学を対象とした本流の英文科が今やコミュニケーションの隆盛によってすっかり衰退してしまった、と慨嘆する。また、批評家・ジョージ・スタイナー（George Steiner）の*Language and Silence*（Faber & Faber, 1967）に拠れば、英文学の本場イギリスにおいてさえ、英文科は停滞気味で、閉塞感が漂っているとのことである。彼は、これを打開し活性化させるためにはひたすら本を読むことに尽きる（A book must be an ice-axe to break the sea frozen inside us. George Steiner 90）、と言う。

今や日本においては社会的ニーズの高い言語教育の役割を英語教育学が果たすようになった。

かつて隆盛を極めた日本の英文学研究は時代に取り残されてしまった感がある。しかし実際のところ、一般企業を主とした日本社会は若年層に、英語運用面だけを求めているのだろうか。即戦力も大事であろうが、同時に実社会は、問題解決能力や創造力の修練をも求めているのではないだろうか。既存の学説を鵜呑みにせず、他者の意見に盲従せず、あくまで自分自身の頭で思惟し、自分自身の言葉で発信するという、そんなホリスティックな能力を学生は必要とされているのではないだろうか。英語が堪能であるだけでなく、英米事情や英米文化にも深く通じた人材が求められているのではないだろうか。近隣諸国との関係も侮れない昨今、英米ならびに世界の事情に通暁した逸材を養成するには、英文学の果たす役割もまだ幾分残っているのではないかと筆者には思われてならない。そのとき私たちは、本稿で取り上げた吉田健一の高邁な学問的精神を、そして峻厳なまでに己の信念を貫き通した学究としての真摯な態度を思い起こさずにはいられないのである。

英文学研究によって産み出される実質的な社会的効果についても、私たちは今、もっと声高に主張してもいいだろう。英文学研究の成果である人文学知を十分に社会に還元することによって、実社会との接点を見出し、実社会に役立たせるべく努めるべきである。政治学者・中西輝政は著書『国まさに滅びんとす』（集英社、1998）のなかで、人間的資質の熟成とも言うべき「イギリスの知恵」は、実は日本の英文学者たちにとってはこれまで関心の対象となるものではなかった、と言う。しかし、本稿で取り上げた吉田健一こそが、紛れもなくまさにこの「イギリスの知恵」の体現者であることを私たちは忘れてはならない。

ブルガリア生まれのフランスの文芸批評家・ツヴェタン・トドロフ（Tzvetan Todorov）は、著書『文学が脅かされている』（2007、小野潮訳、法政大学出版局、2009）のなかで、人間理解のためにも幅広い分野で文学作品が果たす役割は大きい、と陳述している。トドロフの主張は、今日の日本の英文学研究界にも充分あてはまるものである。実際、今まさに日本の英文学研究には、人間理解のための「貴重な助力」的資質が期待されているのだ。そしてこれこそが実践知性としての英文学研究のありようだと、筆者には思えてならない。今後、主体的な英文学研究を追求してゆく日本の英文学研究者たちにとって、吉田健一の存在は大きな意味をもつであろうことは確信しうる。吉田健一が後代に遺した文化遺産は、今後の日本の英文学研究界の活性化にとってのひとつの至宝と言っても間違いなからう。清水徹と松浦寿輝の対談「黄昏へ向けて成熟する」（『ユリイカ』2006年10月号所収、青土社）のなかで松浦寿輝は、「戦後日本のモデルはずっとアメリカだったわけですけども、これからはイギリスになっていくんじゃないですかね。繁栄の絶頂を越えて、社会のスピードが緩くなっていく時期にどういう生き方がありうるのかと考えるとき、ケースモデルになりうるのは同じ島国の英国のはずで、日本はこれから少し時間をかけて、英国的成熟についてじっくり思いを凝らした方がいいと思うんですよ。……そういう時に吉田健一を読むと、いろんなヒントがあるんじゃないか」（清水徹／松浦寿輝 65）と述べているが、松浦寿輝同様、筆者も含めた日本の英文学研究者は吉田健

一から「いろんなヒント」をもらいたいものである。

英文学を英語教育学の応用篇と捉え、英語教育を全人教育と考える筆者は、吉田健一の英文学に対する識見を前にして、豁然と目を開かされる想いがする。そしてそれと同時に、英語教育学の立場から、「大学英語教育の現状と展望」（『英語青年』1982年8月号所収、研究社）と題する論考において英語教育学者・小池生夫（元大学英語教育学会会長）が語る「今まで述べたすべての根幹に、人間愛に基づく人間教育があるということは言うまでもない」（小池生夫258）という言葉にも筆者は共感を覚えることを告げて、本稿を終えたい。

注

- 1) Cf. 宇佐見太市、『実践知性としての英文学研究』（関西大学出版部、2014）
- 2) 宇佐見太市、『実践知性としての英文学研究』（関西大学出版部、2014）、pp.3-20.
- 3) Cf. 土田知則／青柳悦子、『文学理論のプラクティス』（新曜社、2001）
- 4) Cf. 吉田茂、『日本を決定した百年一附・思出す俣』（中央公論新社、1999）
- 5) 米原万里、『米原万里の「愛の法則」』（集英社、2007）、pp.179-180.
- 6) Cf. 宇佐見太市、「英文解釈：『大いなる遺産』第2章」（*The JASEC Bulletin* 『日本英語コミュニケーション学会紀要』第24巻第1号所収、日本英語コミュニケーション学会、2015年12月）
- 7) Cf. 斎藤兆史編、『言語と文学』（朝倉書店、2009）
- 8) Cf. 菅原克也、『英語と日本語のあいだ』（講談社、2011）
- 9) Cf. 山本史郎、『名作英文学を読み直す』（講談社、2011） Cf. 宇佐見太市「書評：山本史郎著『名作英文学を読み直す』（『年報』ディケンズ・フェロウシップ日本支部第34号、2011所収）
- 10) F. R. Leavis, *Education and the University: A Sketch for an 'English School'* (Books for Libraries Press, 1943; reprinted 1972), p. 69.

引用参考文献

- 荒川洋治『文学の空気のあるところ』中央公論新社、2015
- 宇佐見太市『実践知性としての英文学研究』関西大学出版部、2014
- 大岡昇平「『英國の文學』と『酒宴』」前田晃一編『吉田健一 生誕100年最後の文士』河出書房新社、2012
- 大津由紀雄『危機に立つ日本の英語教育』慶応義塾大学出版会、2009
- 大八木敦彦「吉田健一の英語教育論」『文教大学女子短期大学部研究紀要』第48集、文教大学女子短期大学部、2005
- 岡崎壽一郎「外国文学研究と受容の問題—19世紀英詩の受容—（磯田光一・吉田健一）」『論集』第39号、駒沢大学外国語学部、1994
- 角地幸男『ケンブリッジ帰りの文士 吉田健一』新潮社、2014
- 小池生夫「大学英語教育の現状と展望」『英語青年』研究社、1982年8月号
- 小山太一「孤独と強さ—吉田健一における英国的なもの」『ユリイカ』青土社、2006年10月号
- 小山太一「言葉に一人で向き合うこと—吉田健一」『英語青年』研究社、2006年11月号

- 斎藤兆史 (編) 『言語と文学』 朝倉書店、2009
- 佐々木隆「書誌から見た昭和時代(戦後)のワイルド受容—吉田健一を中心に—」『日欧比較文化研究』第9号、日欧比較文化研究会、2008
- 島内裕子「吉田健一年譜・書誌」前田晃一編『吉田健一 生誕100年最後の文士』河出書房新社、2012
- 島内裕子「吉田健一年譜」池澤夏樹編『吉田健一』河出書房新社、2015
- 清水徹／松浦寿輝「黄昏へ向けて成熟する」『ユリイカ』青土社 2006年10月号
- 菅原克也『英語と日本語のあいだ』講談社、2011
- 高橋智子「吉田健一参考文献目録」『日本女子大学紀要文学部』第51号、2002
- 土田知則／青柳悦子『文学理論のプラクティス』新曜社、2001
- トドロフ、ツヴェタン『文学が脅かされている』2007；小野潮訳、法政大学出版局、2009
- 中西輝政『国まさに滅びんとす』集英社、1998
- 長谷川郁夫『吉田健一』新潮社、2014
- 藤本寿彦「年譜」島内裕子編『英国の青年 吉田健一未収録エッセイ』講談社、2014
- 松浦寿輝「吉田健一の贅沢」『UP』402号、東京大学出版会、2006
- 水村美苗『續明暗』筑摩書房、1990
- 水村美苗『私小説 from left to right』新潮社、1995
- 水村美苗『本格小説』新潮社、2002
- 水村美苗『日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』筑摩書房、2008
- 水村美苗／梅田望夫「特別対談：日本語の危機とウェブ進化」『新潮』2009年1月号
- 水村美苗『増補 日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』筑摩書房、2015
- 宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』研究社、1999
- 武藤康史「吉田健一の青春—年譜形式による伝記の試み」『文學界』文藝春秋 2007年9月号
- 山本史郎『名作英文学を読み直す』講談社、2011
- 吉田暁子「父と語り合った夜の言葉」『文藝春秋』文藝春秋、2006年2月号
- 吉田暁子『父吉田健一』河出書房新社、2013
- 吉田健一 翻訳『覚書 (マルジナリア)』芝書店、1935
- 吉田健一『英國の文學』雄鷄社、1949
- 吉田健一『シェイクスピア』池田書店、1952
- 吉田健一 翻訳『シェイクスピア論』思索社、1948
- 吉田健一 翻訳『ふしぎな国のアリス』小山書店、1950
- 吉田健一 翻訳『息子と恋人』小山書店、1950
- 吉田健一 翻訳『ロビンソン漂流記』新潮文庫、1951
- 吉田健一 翻訳『木曜日の男』早川書房、1951
- 吉田健一 翻訳『ジェイン・エア』『世界文学全集22』集英社、1968
- 吉田健一『英國に就て』筑摩書房、1974
- 吉田健一『英語英文学に就て』筑摩書房、1975
- 吉田健一『英國の文學 シェイクスピア 吉田健一著作集第一巻』石川淳／河上徹太郎／中村光夫監修、篠田一士／清水徹／丸谷才一編集、集英社、1978
- 吉田健一『近代詩に就て 英語と英國と英國人 吉田健一著作集第九巻』石川淳／河上徹太郎／中村光夫監修、篠田一士／清水徹／丸谷才一編集、集英社、1979
- 吉田健一『交遊録 東京の昔 吉田健一著作集第二十二巻』石川淳／河上徹太郎／中村光夫監修、篠田

- 一士／清水徹／丸谷才一編集、集英社、1980
- 吉田健一『英語と英国と英国人』講談社、1992
- 吉田健一「英国の青年」島内裕子編『英国の青年 吉田健一未収録エッセイ』講談社、2014
- 吉田健一『英国に就て』筑摩書房、文庫版、2015
- 吉田茂『日本を決定した百年一附・思出す俣』中央公論新社、1999
- 米原万里『米原万里の「愛の法則」』集英社、2007
- Cook, Guy, *Translation in Language Teaching: An Argument for Reassessment* (Oxford Univ. Press, 2010)
- Leavis, F. R., *Education and the University: A Sketch for an 'English School'* (Books for Libraries Press, 1943; reprinted 1972)
- McClellan, Edwin, *Kokoro* (Regnery Gateway, 1957)
- Steiner, George, *Language and Silence* (first published by Faber & Faber 1967; Penguin Books 1979)
- Widdowson, H. G., *Practical Stylistics: An Approach to Poetry* (Oxford Univ. Press, 1992)